

早期刈取りと適正な乾燥・調製で、食味・品質の優れた米を生産しよう！

稲作指導情報 第11号
平成11年9月22日
青森県農業生産対策推進本部

<作業のポイント>

刈取作業は、断続的な降雨等で遅れている。刈取作業を急ぎ、適期内の刈取りで食味・品質の優れた売れる米を生産しよう。

刈取作業を急ぎ、刈取適期内に終了する。

雨水が停滞しないよう、排水対策を実施する。

水分の高い穀は、収穫後早めに乾燥機に搬入する。

適正な乾燥・調製で1等米を生産する。

稻わらは堆肥にしたり、秋鋤込みなどして、有効に活用し、わら焼きは絶対行わない。

農作業の安全に努め、事故のないようにする。

1 登熟状況

(1) 農業試験場作況田の登熟状況(9月10日現在)

ア 登熟歩合は黒石(本場)、藤坂(支場)ともにかなり高く、黒石では「むつほまれ」「つがるロマン」とも平年より12~13%、藤坂の「むつほまれ」は40%、「かけはし」は36%高かった。

イ 「ゆめあかり」の登熟歩合は、黒石、藤坂とも「むつほまれ」並みであった。

表-1 作況田の登熟状況(9月10日現在)

場所	品種	出穂期(日)		1穂粒数(粒)		m ² 当たり粒数(×100粒)		登熟歩合(%)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
黒石	むつほまれ	7/29	8/4	88.6	90.6	401	404	82.2	70.3
	つがるロマン	8/1	(8/6)	79.7	(82.4)	276	(296)	83.1	(70.8)
	ゆめあかり	7/29	-	82.8	-	413	-	75.8	-
藤坂	むつほまれ	8/1	8/8	76.4	84.6	340	373	91.0	51.1
	かけはし	7/28	(8/5)	62.4	(77.5)	303	(373)	92.3	(56.5)
	ゆめあかり	7/31	-	70.9	-	349	-	84.9	-

注) 本年の1穂粒数及びm²当たり粒数は暫定値

「つがるロマン」と「かけはし」の平年値は過去3か年の平均

(2) 県内の登熟状況(9月16日現在)

ア 登熟歩合は、全県的に平年を上回っており、ほとんどの地点すでに成熟期に達している。

イ 特に、県南地域で平年を大きく上回り、地域差が小さくなっている。

表-2 各地域の登熟歩合(9月16日現在) (単位: %)

地域	東	青	西	中弘南	北	五	上十三	下	む	三	八
品種	むつほまれ		つがるロマン		むつほまれ		かけはし	むつほまれ			
本年	83.7	83.5	81.8	87.5	82.0	89.0	87.1				
平年	61.3	75.5	75.0	77.1	52.9	70.7	62.3				
平年差	+22.4	+8.0	+6.8	+10.4	+29.1	+18.3	+24.8				

注) 各地域農業改良普及センタ-の生育観測田の調査結果

平年値は「むつほまれ」が過去5~13か年、「つがるロマン」が3か年、

「かけはし」が4か年平均

2 これからの農作業と管理

(1) 適期内の刈取り

ア 刈取りは、「むつほまれ」や「ゆめあかり」では出穂後の積算気温が1,200 増まで、「つがるロマン」では1,150 までに刈り終える。

今年は、津軽中央地域の「つがるロマン」では大部分が1,150 に達し、津軽地帯や南部内陸地帯の「むつほまれ」でもそろそろ1,200 に達することから、刈取作業を急ぐ。

イ 秋雨前線の影響で断続的な降雨が続いているが、雨水が停滞しないように排水対策を万全に行い、収穫作業が遅れないようにする。

ウ 収穫機械が水田に入れる状態であれば、多少の停滞水があっても、収穫作業を進める。

エ 倒伏した部分は、穂発芽などが発生し品質が低下するので、別に刈取る。

オ 刈取り後、水分が高い粉を長時間堆積しておくと、ヤケ米や発酵米等が発生し、品質低下の原因になるので、早急に乾燥機に搬入する。

表 - 3 各地域における積算気温1,150 、1,200 の到達日（単位：月日）

地 点	出穂期	到達予想日		地 点	出穂期	到達予想日			
		1,150	1,200			1,150	1,200		
青蟹	森	8/ 4	9/22	9/25	十	和 田	8/ 2	9/22	9/26
今	田	8/ 7	9/30	10/ 4	三	和 田	8/ 7	9/29	10/ 2
鰯	別	8/ 4	9/26	9/29	野	辺 地	8/ 6	9/30	10/ 4
深	沢	8/ 3	9/22	9/25	六	ケ 所	8/ 6	9/30	10/ 4
弘	浦	8/ 2	9/20	9/23	む	大 間	8/ 6	9/30	10/ 3
黒	前	8/ 3	9/21	9/24	大	小 田 野	8/ 5	9/27	9/30
碇	石	8/ 4	9/23	9/26	小	野 沢	8/ 6	10/ 1	10/ 4
ケ	関	8/ 1	9/19	9/22	脇	ノ 沢	8/ 6	9/29	10/ 2
五	川	8/ 3	9/21	9/24	八	戸 戸	8/ 3	9/23	9/25
所	原	8/ 6	9/27	9/30	三	戸 戸	8/ 1	9/18	9/21
市	浦								

注) 出穂期は、気象観測地点の所在する市町村の出穂最盛期

積算気温の到達予想日は、出穂後9月19日まで本年値、9月20日以降は平年値を使用して算出

(2) 乾燥

ア 乾燥中の粉水分を時々測定し、玄米水分を15.0 ~ 15.5%に仕上げ、過乾燥を防止する。

イ 降雨等で粉水分が高い場合は、初期の送風温度を下げて乾燥し、粉水分が20%程度になってから所定の送風温度にする。

なお、品質や食味を維持するには、低温でゆっくり乾燥するのが良いとされており、粉の水分が18%程度に低下したときに、最低5時間程度休止して水分ムラを解消した後、仕上げ乾燥を行う。（二段乾燥法）

ウ 乾燥機の張込量は最低張込量以上とし、なるべく満杯で運転する。

オ 自然乾燥は、好天が続くときを見図らって実施し、粉水分が高い場合は、乾燥機で仕上げ乾燥を行う。

(3) 調製

ア 米選機の網目は1.9mmを使用し、米選機の適正な流量を守って、整粒歩合80%以上を目標に調製する。

イ 粉ずりは、穀温が高い状態で行うと肌ずれ米の発生が多くなるので、常温まで下がったのを確認してから行う。

ウ 米選機は、目詰まりが生じないように点検を行いながら作動させる。

(4) 稲わらの処理

ア 稲のわら焼きが社会問題となる一方で、水田土壤では有機物やけい酸含量が年々少なくなっている。

イ 稲わらは貴重な資源であり、環境や健康にやさしい農業のためにも、焼かずに堆肥にしたり、秋に鋤込みをして水田に返し、きれいな青空と健康な土づくりに活用する。

ウ 寒冷地の土づくりは、完熟堆肥を施用することが基本であるが、条件的に可能な

地域では、次の事項に留意して、稲わらを水田に鋤込む。

- (ア) 稲わら施用は秋鋤込みを基本とし、石灰窒素等の腐熟促進資材を散布する。
- (イ) やむを得ず春に鋤込みむ場合でも、腐熟促進資材を秋のうちに散布する。
- (ウ) 稲わらを鋤込む際はできるだけ深耕する。

(5) その他

ア コンバインの走行跡やくぼ地等に滞水するような水田では、翌春の耕起を容易にするため、溝切りを行い排水を促す。

イ 農作業安全に努め、事故のないようにする。

————「つがるロマン7・8・9作戦」の展開————
たんぱく質含有率（玄米）7.0%以下、整粒歩合80%以上、
1等米比率90%以上を確保し、「つがるロマン」の銘柄確立
をしよう！
9月の重点推進事項・・適期内刈取（積算気温1,150まで）
・・乾燥調製の適正化

10月は「稲わら焼却防止強化月間」です。
わら焼きをやめ、土づくりを進めましょう！